

# 保育所の 家庭化的運営

鈴木豊藏

「家庭は、文明の所産の中、最も高い、また最も美しいものである。而も精神と性格の基礎を形づくるものである。」といわれるが、「健全な家庭」これ程子供の健全な育成に必要な欠くことの出来ないものはない。

家庭がノーマルでなく、子供が家庭に恵まれない、保育に欠くところがある場合、その欠陥を補うために、保育所その他の施設が必要になつて来る。だから保育所その他の施設は、家庭に代る場所であり、ノーマルな家庭を見做つたものでなければならぬ。少くとも、それに近い設備や運営の方法をとられることが望ましい。この観点から、現在の保育所やその他の施設をながめると、その設備や運営の面において、可なりの距離があるよう

しいことではない。

一、保育所の在り方

さて、保育所の在り方はどうで

なければならぬか。保育所の保育室は、保育の基礎的単位であつて、極めて重要な役割をもつてゐる。保育室は、一人の保母を中心とする一つの家庭、しかもノーマルな家庭に近いものであつて欲しい。そして他の保母を中心とするいくつかの保育室は、近所隣り即ち隣組のようなものに考えたい。だから保育室は、保母一人に小さくとも一室が与えられ次のようなものであることが望ましい。

第一に、識見の高い人格の立派な、そして子供から母と慕われる性格をもつた保母を中心とし、愛によつて睦み合う家族であり家庭でありたい。嬉しいこと悲しいことが何があつても飛込んで来て報告し、喜憂を分か合つた家庭でありたい。何等の不安もなく、安定感をもつた落着きのある生活の本拠でありたい

層敷きの保育室もあるが、却つてその方が日

本の家庭的雰囲気をかもし出すようにも思われる。愛によつて包まれ、親しい気分になつていけば、時には保母を先生といわず、うっかり「お母さん！」と呼ぶようなことがあるのがよいのではないか。

保育室の名称も——時には番号までもつけているが——花の名か保母さんの名でもというならば、何々保育所という名称も、何とか子供の親しみやすい、魅力を感じるような名称に改め得ないものだろうか。今学校では受持ち先生の苗字をとつて、誰々ホームルームといつてゐるが、保育室は正にホームルームである。

ホームルームである保育室は、小さいで時計もあれば、花瓶には花も匂つてゐる。子供の作品も貼られ、清楚な飾りもあり、潤いのある温かい雰囲気にも包まれてゐる。子供等は此のホームでなごやかに歌いお話しもきき、いわゆる自由遊びがくりげられる。給食もいたゞき、安心して午睡もする。大きい室で大勢一緒に寝ると違つて、早くしかも深い眠りにつくことが出来る。

子供の誕生日には、家族同志色々な工夫をして、その子供の前途を祝つてあげ、お祝いとして、全部の子供等に、だんごか煎餅でも

与えられたら此の上ない。

祝祭日には、ホームの入口に国旗を掲げ、七夕、クリスマス等の行事には、小さくとも自分等のものを作つて飾りたいものである。もつとも隣組一同で大きなものを作つて飾ることも結構なことである。かような保育所の運営によつて、豊かな心ののびのびした気分の子供に育てることが出来るであらう。

くり返して云うが、保母一人に対し、小さくとも一室を与えることは、是非必要だということ強く提唱したい。同時に保育室毎に保母の自由裁量で使い得る——勿論子供のために生かして——経費を予算に計上しておいていただきたい。これは設立者乃至所長さん方に、再考を煩わしたい点である。

## 二、保育の在り方

保育のことは、全面的に保母の人格力量に依存せざるを得ない。だから保母は第一に、立派な母代りとなり得るために、人格識見を高める修養を怠つてはならない。

次に「その子を知ること母に如かず」と云われるように、母代りとなり、全責任をもつて保育にあたるのであるから、子供をどの方面からもよく知つて居ることが大切である。子供の家族関係は勿論、人的物的環境の調査

子供の誕生前から、誕生後の経歴境遇の変化等の調査、子供の個性特に知能、性格、性癖、長所短所等の調査、身体的方面でも、身長、体重、胸圍などは勿論、發育の良否、既往の疾病、現在の健康状態等、各方面の角度から調べて、よく子供一人々々を読んでおくことが大切である。特に問題児においては、キースワーカーとしての務めも果さなければならぬ。それを一々記録にとめておく許りではなく、その後の保育経過を追加記録して行くようにする。単に記録するだけではなく、その理解の下に、その都度その場合に應じて、應機応変適切な保育が出来るようになっていなければならない。若し子供が休んだら、直ぐ家庭訪問もするし、子供が怪我をしたり、病氣になつたら、母の気持ちと責任とにおいて、適当な処置をとらなければならない。すべての子供に対して、平等公平に愛し乍ら、打ちくつろいだ間に、たしなめもし、暗示も与え、注意もしてやる。かくて、保母の全人格による温かい感化指導が行われる時、子供は心身共に健やかに成長發達を遂げるのである。

これは某乳児院の話である。乳児院としては、現代科学の示す合理的な方法で、授乳その他の保育をして居るのであるが、子供はど

うも肥らない。ところがその子供を里親に託して、家庭で保育したら、まるまると肥つたという。普通の家庭では、子供の科学的保育から見ると、実にはらはらするようなことも随分多いことであらう。而も子供がまるまる肥るという事実について、何か大きな示唆を与えられるような気がする。家庭には、科学や理窟を超えた非合理性が多分にあり、それが子供を健やかに育てる大きな力となつて居ると思われる。吾々保育に当るものに対し、大きな暗示を与えるものとして、深く考えさせられるものがある。そこが保育所の家庭化を叫びたい所以である。

## 三、施設運営の在り方

保育所の施設としては、大きい規模のものより、小さい規模のものが理想的だといわれる。その理由の一つは、前に述べた趣旨に基づくものではないか。保育所としては、大工場における大量生産的なものは、自然家庭化の運営に遠ざかりやすい。

此の間保母学院の生徒を連れて某地方の施設見学の旅に出たが、或る所に宿泊した時、小さい室は満員だからといつて、大広間に通され、全員枕を並べて寝についた。生徒たちはそこに何かの満たされない感じを持つたら

しい。恐らく気の合つた同志数人ずつ、各室に分れて静かに休んで、疲れを癒したかつたのであろう。そこに吾々は、何か考えさせられるものがあるように思われる。保育所によつては、定まつた所謂自分らのホームルームがなく、大工場のように、大きな一つか二つの室で、朝から晩まで大勢の子供を一緒に、幾人かの保母の共同指導によつて、一斉に動かし、一斉に遊ばして居るところがある。それでは、家庭の生活から遠ざかることになり子供等は安住するところもなく、生活の中心点もなく、精神的に満たされない所が多いことであらう。

殊に養護施設や精神薄弱児施設、教護院などの収容施設は、全然家庭から離れて居る子供達であるから、特に家庭に代る施設でなければならぬ。乳児院などで、大きな室に沢山のベットを並べ、一方から順々定まつた通り授乳し、おむつの取替えをするというだけでは、子供等には満たされないところが多いことと思う。或る養護施設では、大きな寮に代るに、住宅に做つた小さな独立家屋をいくつも建て、住宅毎に、保母中心の家庭的雰囲気を作つて、その中に生活をさせ、周囲の空地をその家の菜園として耕して居る所がある。このやり方に大きな暗示を受けざるを得ない

保育所の場合も、保育室が住宅式に出来たら申分ないと思う。保育所の施設の大小は、そのよし悪しを決定する条件ではなく、その運営が家庭化されているかどうかによつて、定まるものだと考える。尤も私の主張する、ホームルームとしての保育室の運営も、子供等のすべての生活を、そのホームルームだけに限るといのではない。大人の社会にも、町内運動会や講演会、音楽会などが催されるように、保育所の隣組の子供等が一緒になつて踊り歌い、紙芝居を見、遠足にも出かけるというようなことがあつてもよいし、それは広く社会性を養う意味において、却つて望ましいことではあるまいか。要は保育に欠ける子供達を、ノーマルな家庭に近い保育所で保育し、各家庭の保育で欠けるところを補つて、円満な人格形成の基礎を養いたいというに他ならない。

(福島県立高等保母学院)

(13頁から)

支配することを学ぶことを期待している。

(二) いわゆる知的活動以外の、社会生活、感情生活、自分自身についての考、他人に対する反応の方法について学ぶことを、最も基本的なものと考えようになつたのではないであらうか。少くとも今迄以上にうんと重要視するようになっていと思う。遊戯や歌やお話などよりも、右のような点について学ぶことを最重要視するからこそ、歌や話を特に定期的カリキュラムの中に入れることをしなくなつていゝらんだと思う。

(三) 児童の発達の条件を今迄以上に、考慮するようになっていゝる。それ故に、今迄行われていた躰の方法を棄てたり年令的に繰り下けたりしてゐるのである。そして臨床心理学が強調するようになった「幼児期に於ける安全感又は安定感こそ児童の将来の精神的健康を支配する可能性が多い」という考え方を、幅広く幼児教育の多くの面に於て採択するようになったものである。

(筆者日本女子大学教授)